

学校経営のポイント

子どもの“学力”と“意識”に関する調査結果

若井 彌一

最近の子どもたちは、学力的にどんな状態にあり、また、自己の将来についてどんな願望をもっているのかは、教育関係の仕事に携わっている者にとって知っておくべき事実である。

今回、その事実を提供する2つの調査結果が報道された。参考になるので取りあげてみたい。

漢字の“読み・書き”(小2～中1)調査

1つは、日本教育技術学会(向山洋一会長)が、全国の公立学校約480校、児童・生徒約3万8,000人を対象(小学校2年～中学校1年)に行った調査の結果である(調査時期はやや古く、平成16年4月～5月とされている)。調査内容は、前年度に学習した漢字の「読み」と「書き」の習得状況である。

報道(5月7日付け『朝日新聞』)によれば、小学校2年～中学校1年を対象に行った調査では、書くことのできなかつた漢字ワースト3は、たとえば1年生～3年生の学習分については、次のようであったという(問題(書けなかつた漢字)・正答率の順。以下、同様)。

〔1年生学習分〕 一つ(一)・7%、五つ(五)・83%、青しんごう(青)・84%。

〔2年生学習分〕 海外(海)・37%、親切(親)・38%、海外(外)・42%。

〔3年生学習分〕 放す(放)・29%、都市(都)・52%、登校(登)・33%。

紙幅の関係上、4年生学習分～6年生学習分については省略するが、4年生分は、関心(関)・21%、5年生分は支持(支)・7%、6年生分は従来(従)・16%、がワースト1であったという。

「漢字力」「国語力」がどうのこうのと騒ぎ立てるほどの結果とは思われないが、子どもの漢字学習の定着度を確認し、指導のあり方を考えるための有

益な参考となる。学会として、ぜひ、継続してこの調査を重ねていただきたいものである。

日・米・中・韓の“高校生意識”調査

もう1つは、財団法人・日本青少年研究所による日本、アメリカ、中国、韓国の4カ国の高校生を対象にした「高校生の意欲に関する調査」の結果である。

報道(4月26日付け『朝日新聞』)によれば、「『偉くなりたい』と思っている割合は、他国の3分の1程度の8%。むしろ、『のんびり暮らしていきたい』と考えている子が多い」という結果であったという。

この調査は、昨年10月～12月に実施され、日本、アメリカ、中国、韓国の高校生各千数百人を対象に行われたとされる。

上述のように、「日本の高校生の特徴」が最も顕著に表れたのが、「偉くなること」についての質問であったというのだが、少々物足りない気もするものの、この結果をもって「日本の将来は絶望的」などと悲観することはなからう。

ただ、この調査では、「暮らしていける収入があれば、のんびりと暮らしていきたい」と思っている高校生が43%であり、14～22%の他国より「抜きんでている」とも指摘されている(前掲『朝日新聞』)。なにほどこかの不満はあったとしても、この国に生きる高校生の現状満足(肯定)ぶりと、その現状に安住して開拓的精神が育っていないことが、あらためて明らかになったと言えるのではないか。

日本青少年研究所は、一連の意識調査を手がけてきた実績をもっている。他の調査も参考にして、今後の教育実践のあり方に活用していきたい。

(わかい・やいち=上越教育大学教授・附属図書館長)

本紙は、<http://www.kyouiku-kaihatu.co.jp>でも掲載

●好評発売中! ● 高階玲治(教育創造研究センター所長)【編】B5判272頁・定価2500円 教育開発研究所

『「学力調査」対応法・活用法—学力向上に生かす具体策と実践』

『関係力～「子どもが生きる学力」への挑戦～』

上越教育大学附属小学校【著】
B5判215頁・定価2520円